

[最近のトピックス]

口腔粘膜炎の新しい対処法, エピシル®口腔用液の紹介

廣瀬 知二

伊東歯科口腔病院

口腔粘膜炎は、がん治療時に発症する紅斑・萎縮・びらん・潰瘍性病変と定義され、いわゆる口内炎とは区別されている。通常の抗がん剤使用時で30~40%、造血幹細胞移植時（大量の抗がん剤使用時）では70~90%、抗がん剤と頭頸部への放射線治療併用時はほぼ100%の高頻度で発現する。口腔粘膜炎は強い疼痛をとめない、コミュニケーション障害や精神的苦痛を引き起こし、闘病意欲を減退させてしまう。また、経口摂取を妨げ低栄養や脱水を招き、二次感染から全身感染症を惹起するリスクがある（上野, 2017）。口腔粘膜炎の予防的ケアとして、含嗽、ブラッシング、保湿を中心とした口腔衛生管理が行われる。その他に、抗がん剤投与中、氷片を口に含んで口腔粘膜を冷却し毛細血管を収縮させて抗がん剤が口腔粘膜に到達するのを抑制する、クライオセラピーが推奨されている。口腔粘膜炎発現後は、口腔衛生管理に加えて、NSAIDsやオピオイド鎮痛薬による疼痛緩和が行われている。

エピシル®口腔用液（ソレイジア・ファーマ）は口腔粘膜炎の外部刺激による疼痛の緩和を目的として開発された、グリセリンジオレート及び大豆ホスファチジルコリンからなる非吸収性の液体である。口腔内に少量を塗布することにより、唾液と混合されてごく薄い脂質被膜を構成し（図1）、口腔粘膜炎表面を物理的に覆うことによって、食物等の外部刺激による疼痛が8時間程度緩和される（Hadjieva T et al, 2014）。

この製品は、すでに、アメリカ、イギリス、ドイツなどでepisil®という商品名で承認・販売されていたが、2017年に「エピシル®口腔用液」として日本国内での販売が承認された（図2）。2018年4月からは一定の要件下で（がん等に係る放射線治療又は化学療法を実施している患者であって、周術期口腔機能管理計画に基づき、口腔機能の管理を行っている患者）、健康保険も適用されることになった。なお、エピシル®口腔用液は薬効成分が含まれないため、医薬品ではなく、医療機器（クラスII）に分類される。今後口腔粘膜炎の新しい対処法としてがん患者のQOL向上に寄与することが期待される。

文献

Hadjieva T et al. Treatment of oral mucositis pain following radiation therapy for head-and-neck cancer using a bioadhesive barrier-forming lipid solution. Support Care Cancer 22(6): 1557-1562, 2014.

上野尚雄. 口腔粘膜炎の発症機序と、がん治療へ与える影響. 緩和ケア 27(1): 5-9, 2017.



図1 (A): 口腔粘膜に接着したエピシル®口腔用液の模式図
(B): (A)の拡大図



図2 エピシル®口腔用液 ポンプを用いて口腔内に内用液を塗布して使用する。